



一昨年の10月号ではクルクマを手にとり撮影させていただきました。



わたなべたかお

渡邊 隆さん(45歳)

愛西市早尾町

この土地だからいそでできる花

一町三反の農地で花ハスやカラー、花菖蒲、クルクマなど様々な花を栽培している渡邊さん。今回は花栽培の魅力と愛西市の特産品であるカラーについて伺いました。

「花は流行の変化が大きい作物です。たとえば昔は大きく立派なものが好まれましたが、最近は小ぶりなブーケが主流で、花だけでなく葉も用いて飾り付けが行われます。また、市場で求められるのも品質や珍しさだけでなく、花屋さんの注文にしっかり対応できるか、という信頼の部分が大きくなっていると感じます。そついった中で、需要に合わせたものを提供できるよう努めています」。「コロナ禍で大きく落ち込んだ花きの需要は回復傾向にあり、現在は供給不足の状況が続いています。しっかり必要なものを必要な分だけ用意することが、次回の注文に繋がり、こちらからの提案なども行えるようになる」と渡邊さんは話します。

そんな渡邊さんが両親から引き継いだカラーの栽培を続けるのはこの土地の性質に理由があります。「カラーは大きく分けて畑地性と水性の品種があります。この地域で昔から栽培がおこなわれているのは水性のもので、色は白く、畑地性のものでより大きく育ちます。春に咲く花なので長い期間出荷をするには温かい環境が必要ですが、この地域は木曾川からの伏流水によって地下水が豊富です。地下水の温度は15度前後、夏は



水を張った圃場。冬場になると午前中は陽の光で、夜は地下水を流してハウスを温めます。

涼しく、冬は暖かいので地下水を流すことで暖房を使わずにカラーの栽培に適した環境を整えることができます。この栽培方法が行える地域は限られており、主な産地が愛西市の他だとう地域しかありません。競合が少ないのも生産者としては魅力です。

また、信頼の話に繋げるなら、産地として生産者が協力して共選出荷を行うことで品質と出荷量が安定するので、花屋さんが安心して注文できるといってもこの土地でカラーを育てる理由です」と話す渡邊さん。長く立派な花を咲かせるカラーですが、最近では流行に合わせて短く切りそろえることで花屋の要望に応えています。カラーの出荷は5月まで続く予定です。